

観光フォーラム

イギリスの城：小史管見

Rise and Fall of Castles in Great Britain

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

I. まえがき

英語の castle（以下本稿では原則として「城」という）は、ラテン語の castellum から来たものといわれ、一般的には、国王や領主などの統治上の拠点となっている、戦闘のための防御用構築物であって、国王や領主の住居ともなっているもの（private fortified residence）である。それ故、例えば英国王室のロンドンにおける居館である“Buckingham Palace”などは、ここでいう castle には入らない。

こうしたものは別にしても、イギリス（本稿では原則としてイングランド、ウェールズ、スコットランドをいう）で、現在とにかく castle といわれているものには、上記の意味が妥当しないものもあり、“真の（true）castle”と“模擬（mock）castle”とを区別すべきという見解がある（L, p.4）。以下 castle というのは“真の castle”をいうが、こうした castle は、イギリスにはそもそもどれほどあるであろうか。

castle についての近年における最も権威ある原典的文献としては、なんといってもキング（King, D.J.C.）の1983年の文献、“*Castellarium Anglicanum: An Index and Bibliography of the Castles in England, Wales, and the Islands*”（2 volumes: 文献 K2）が有名である（K1, p.18）。ただしこれは、書名からもわかるように、イングランドとウェールズのみが対象である。同書では、城として現存していないものも含め、収録されているサイトは、イングランドで2,413箇所、ウェールズで688箇所である（文献 K2 による）。

こうしたものを基礎的データとして、インターネットでみると、“Britain Express”が、いわば現在の観光において見聞に値するとして挙げている castle の数は、イングランドで178、スコットランド117、ウェールズ41、計336を数える（文献 B）。これらこそは“真の castle”とみていいが、かなり多くの城があるといえる。

これらの城の中で歴史的にも特に意義が高いものを示した日本の資料としては、公益財団法人・日本城郭協会が2010年12月に公表した『ヨーロッパ100名城』リストがある。このリス

トは、ヨーロッパ全体を対象にしたものであり、かつ、ヨーロッパ内における比較に限定したものであるが、日本城郭協会の手承を得て、本稿末尾（別表）で転載している。

以下ではイギリスにおける城の小史を管見するが、次の点を前提として知っておいてほしい。まずイギリスの歴史についてみると、ソールズベリー近郊のストーンヘンジに見られるような先史的時代があり、それに続く古代史としては、イギリスでもローマ帝国支配時代があった。それに続いてアングロサクソン王朝といわれるものができたが、この王朝の時代にノルマン人の侵攻が起きた。

すなわち1066年、ノルマンディ公ウィリアムは、イングランドに侵攻し、当時のイングランド王ハロルド2世を打ち破り、イングランド王になってノルマン王朝を樹立した。ウィリアム王は、占領支配を確実にするため、ロンドン塔をはじめ拠点となる城をイングランド内に多く作った。イギリスにおける城の歴史は、本格的にはここに始まる。なお、ウィリアム王の宮殿では、当初はノルマンなまりのフランス語が使われていたが、現地のイングランド言葉と徐々に融合し、現在のような英語になったといわれる。

その後の歴史で注目されることは、1536年ウェールズが、そして1707年にはスコットランドがイングランドに併合されたことである。その一方、1949年には南アイルランドがエール共和国として分離、独立した。

なお、本稿は主として末尾掲載の参照文献に拠ったものであり、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。イギリスの城についての研究は、イギリスを中心に実に盛んで、その文献は、例えば本稿参考文献 C1 および K1 においてかなりの数のものが挙げられている。専門的な研究・論文の取り組みにはこれらを参考にされたい。本稿は、本稿筆者の見聞記を含むものであり、あくまでも本誌「観光フォーラム」のためのものである。

II. 本格的な城の出現

もとよりアングロサクソン王朝時代にも castle とよばれるものがあつた。しかしこれらは多くが防御的のタウン (fortified township) といわれるもので、“真の castle” とはいえないとされている。これに対しノルマン王朝が築造した城 (Norman Castles) は、確固たる支配統治の必要もあり、本格的な城というべきものが多かった。ただし築城の場所 (所在地) は、必ずしも戦略的に決められたのではなく、例えばローマ帝国時代からあつた交通の要衝などを中心にしたものであつた。作られた城はかなり多かった。その数は、城的なものも含めると、最高時には 500~600 に達したといわれる (C1, p.4)。

これらの城は、本格的なものでは、構造上“モット・アンド・ベイリー (motte and bailey)”といわれるものが多かった。その端的な原型は、今日でもカーディフ (Cardiff) 城にみることができる。現英国王室の週末的滞在地、ウインザー城 (Windsor Castle) も本来はこの一種とみられる。

この方式では、まず土盛りした小高い丘的なもの (motte) が作られ、そこに本丸的な建物 (keep または donjon といわれる) が建てられる。その外に堀的なもの (ditch) があるものが多い (C1, p.6)。堀的なものの土でモットが作られたのである (T2, p.1)。周囲は空き地 (bailey) で囲まれているが、その外、つまりベイリーの外境には柵 (stockade) があるものも多い。

モットの起源については、ノルマン王朝の城以前にすでにあつたという少数意見があるが (K1, p.6)、ここではこの点は別として、ノルマン王朝時代に作られた城をみるとその 80% ほどは、“モット・アンド・ベイリー”方式であつたといわれる (C1, p.5)。その際キープは、最初は木造製であつたが、後に石造りとなつた。

この“モット・アンド・ベイリー方式”の場合、土盛りなどに多くの労働力が必要であつた。しかしそれは、比較的単純労働であつたために、新支配者としても調達が比較的容易であつた。故に比較的迅速に城を完成することができた。これが、この方式が多く採られた理由といわれる (C1, p.5)。

石造りが一般的になつたのは 12 世紀であつた。石造りのためには熟練労働が必要で、作業は簡単には進まなかつた。しかし石造りキープでは当初、構造上直角型 (rectangular: 城壁面が平面的) のものが多く作られた。石造りでは建築上この方が容易であつたからである。

石造りの普及とともに、シェル型キープ (shell keep) といわれるものが現れた。これの簡単なものは、キープの外壁が丸曲線となるよう全体を円筒型にして、内部に必要な部屋等を設け、中心部は中庭として残しておくものである。レストメル (Restormel) 城は典型例で、外壁はほぼ完全な円筒形を成している。ウインザー城内の円筒形建物もこの例である (S, p.2)。これはひとつには、石造りキープでは、多くの場合重みのため、少なくとも作つたばかりのモットの上部は、一部にしろ、空地にしておく必要があつたためである。

これが進むとさらに、シェル型キープと直角型キープとを結合した、“concentric castle”といわれるものも現れた。これらのものでは多くが、城内部がいくつかの層の壁で仕切られたものとなつていた。城内部で防衛戦となつた場合でも有用であることを意図したものであつた (T2, p.3)。

この場合、城壁やタワー (櫓) 等で外壁を丸曲面とするもの、すなわち円筒型にするものがより多く作られるようになった。その大きな要因は、攻撃用武器として投石器 (catapult)、中でもより強力な投石器であるトレビュシェット (trebuchet) が登場したことである。トレビュシェットがイギリス国内で最初に使用されたのは 1217 年といわれるが、その命中率や破壊力は、旧来の投石器にくらべ革命的に高いものであり、強力なものであつた。城を守る側では直撃弾被害を避けるため、城壁面を平面的なものから曲線的なものにしたり、タワーを四角型的な直線的なものから、円筒型的なもの、曲線的なものとするのが盛んになつた。

その後さらに弓矢として精度の高い“いしゆみ (crossbow: 弩)”が現れ、城側ではアロースリット (arrowslit: 日本の城でいう狭間: 銃眼) が重要性をもつものとなつた。

III. 威容ある城の登場

ウェールズ地方の場合、土着領主の城において、ノルマン王朝型の城を真似た、円型キープや落し格子 (portcullis) 付きの門楼 (gatehouse) を備えたものが築城され始めたのは、およそ 13 世紀後半であつたが、これに備えてか、ウェールズ地方で本格的な石造りの、堅固・壮大な“名城”として名高い (K1, p.24) カーナーヴォン (Caernarfon) 城やコーンウィ (Conwy) 城等を作つたのは、当時のイングランド王、エドワード 1 世 (在位 1272~1307) で、ウェールズへの侵攻・支配の軍事的拠点として築造されたものである。

これらの城、特にカーナーヴォン城やコーンウィ城は実に見事なもので、今日では世界遺産となつており、その石造りの巨大さ、城らしい威容は現在でも人々を感嘆させずにはおかぬものである。これらの築造のためにはとりわけ熟練した石工などを多数必要とした。かれらは主としてイングランドから徴集されたものであつた。そのためイングランドではそうした熟練職人が一時的に払底したといわれる (C1, p.14)。

その一方、イングランドでは 13 世紀中葉以降、城に居住する王や領主などの居住空間を比較的豪華絢爛にする試みも進んだ。この傾向は“王宮要塞化 (palace-fortress)”といわれる。例えばウインザー城の場合、こうした王宮化改修を試みたのはエドワード 3 世 (在位 1327~1377) で、改修のために使われた資金はエドワード 3 世の平均年収の 1.5 倍であつたといわれる (C1, p.15)。

こうして 14 世紀末ごろまでには、世界に冠たる“イギリス・ゴシック末期様式 (perpendicular style)”の城ができた。これらの城は、対戦闘用防御一点張りというよりは、住民や関係者

から“立派な城”として賛美されることを重要な誘因としたものであった。タワーなども防御より美観を第一とし、角型のものも良しとされた。イーストサセックスにあるハーストモンズー (Herstmonceux) 城などは典型といわれる (L, p.3)。当時における城の建造・改修の動きは、「イングランド・ウェールズにおける城構築の第2のピークの時代」といわれる (C1, p.15)。

IV. 火薬使用武器の登場

その後においてイギリスでも城のあり方に大きな影響を与えたものは、火薬を材料とした大砲などの武器が登場したことである。こうした火薬使用武器が登場したのは、イギリスの場合概ね1320年代以降といわれる (C1, p.15)。例えばリチャード2世 (在位1377~1399) は、600ポンド (約272キログラム) の大砲をロンドン塔に装備している。これらの初期の火薬使用武器は、操作上安全性が低く、発射に際し操縦者自体が重傷を負うこともあって、武器としての実際的な実用性は低かったが、城を守る側では、(攻める側の) トレヴィシエットなどの投石器に対抗する武器としては、かなり有効であった。

一方、城攻撃側では、当初、こうした火薬使用の重い大砲や弾丸は攻撃用武器としてはそれほど有用なものではなかった。というのは、それらを使うためには、それを戦闘地 (多くの場合敵地) まで運ぶことが必要であり、そしてその道路は堅固であることが必要であった。しかし当時、道路は一般的にはそれほど堅固なものではなかったもので、戦闘地まで運ぶことが実に困難であったからである。例えば1599年のカヒール (Cahir) 城の攻略では、本格的な大砲攻撃が可能であったら、もっと早く陥落していたであろうといわれている (C1, p.20)。

こうした中、城の攻防において銃砲 (artillery) など火薬使用武器が中心的役割を演じたものは、1642年におきたいわゆるピューリタン革命、すなわち English Civil War であった。これはイギリスにおいて本格的に銃砲と火薬 (gunpowder) を用い、長期にわたって行われた最初の戦いといわれている (C1, p.21)。

この戦いでは、城はそれぞれの占拠者の戦いの目的に応じて、改めて防備を固め、例えば土塁を増加したりして強化することが行われた。籠城軍に対して攻城軍側が、“対抗壁 (counter-mure)” を作る場合もあった。攻撃用武器では、大砲以外に、迫撃砲 (mortar) が登場した。例えばスコットランドのスターリング (Sterling) 城のように、中庭 (court-yard) が小さいコンパクトな城の攻撃には特に有効であったといわれる (C1, p.22)。

この戦いでは、攻防の場所は、城を含めて300箇所以上に達し、リッディアード (Liddiard, R.) のように、「この17世紀の戦いで示された城の軍事的役割は、それまでの中世以来のすべての歴史を超えるものであった」と評しているものもある (cited in C1, p.15)。この戦いそのものは、1649年クロムウェル側の勝利で終り、クロムウェルは共和制を宣した。しかしかれ自身が1658年死去したこともあり、1660年王制復古となり、チャー

ルズ2世 (在位1660~1685) が即位した。

しかしこの共和制の間に、特に王制擁護の拠点となった城を中心に破壊措置がとられた。中には費用の関係もあり、城壁の破壊だけに終わったものもあるが、全体的にみれば、“王宮要塞”といわれた華麗な城も多くがみじめな状態になった。さらに王制復古後の復興の時代 (Restoration Years) には、1665年ペストの大流行、1666年にはロンドン大火災があり、チャールズ2世が成しえたのは、結局、ウインザー城の復旧ぐらいであった (C1, p.22)。

城自体についても、大砲や迫撃砲の攻撃には城は所詮防衛上無力ということがわかり、城が戦闘用防御で大きな役割を果たす時代は終わったということが広く社会的に認知されてきた。それよりも城は、王や領主の居住用の館としての機能の方が肝要という考えが広まっていった。

こうした状況の中、城は牢獄 (gaol: jail) として使用される例が多くなってきた。1800年代のナポレオン戦争の時などは典型的であった。中でも有名なものはロンドン塔で、すでに1100年から牢獄として使用され、16~17世紀には最盛期となっていた (T1, pp.1-2)。当時は処罰者には「ロンドン塔に送れ (send to the Tower)」が決まり文句といわれ、苛酷な取り調べ、拷問、処刑にともなう霊気漂うおぞましい雰囲気は、夏目漱石の『倫敦塔』で知られている。現在もその用具の一部などが塔内に陳列されている。

ロンドン塔は、第二次世界大戦中も牢獄として使用され、同大戦中1941年5月10日ドイツから単独飛行してイギリスに來た、旧ドイツ・ナチス党の大幹部、ヘスが終戦時まで監禁されていたのは、ロンドン塔である。さらに同塔では1941年8月15日ドイツ人スパイが死刑になっている。これが最後の処刑者といわれる (T1, p.5)。

さらに、近年におけるスコットランドの独立運動のことも考え、エジンバラに関連し一言付記しておきたい。まずエジンバラ城は、エジンバラ駅のすぐそば、丘の上にあり、スコットランドを象徴するものとして、いくつかのものが保管されている。この城の前から、丘の下ホルリードハウス宮殿 (The Palace of Holyrood House) までは“ロイヤルマイル (The Royal Mile)” といってエジンバラを象徴する大通りである。

ホルリードハウス宮殿は、スコットランドにおける英国王室用の宮殿であるが、スコットランド女王メアリー・スチュアート (Mary Stuart: 生年1542~1587) のエジンバラ時代の多くの悲話はこの宮殿のものである。メアリー・スチュアートで忘れられないことは、その後のことである。彼女は、スコットランド女王退位後、イングランドに亡命した。そこで種々な経緯・事件があり、最後は、当時のイングランド女王エリザベス1世 (在位1558-1603) の裁可のもと、1587年フォーザリゲイ (Fortheringay) 城で死刑 (当時は原則として斬首刑) に処せられた。

イギリスではロンドンを筆頭にいわゆる“ダークツーリズム”が、今日でも盛んであるが、背景にこうした多くの事情があるものと

思われる。

V. あとがき

イギリスの城が、とにかく社会的に一応落ち着いた位置を占めるようになったのは、全般的にみると、1700年代後半であった。それは何よりも、この頃から城を観光的に開放することが始まっているところに示されている。例えばウィンザー城では、すでに1740年代に、やや限定的ではあるが、観光客の見学を可とし、1750年代にはガイドブックまで出ている。

イギリス全体でみると、1770年代～1780年代に牧師のギルピン（Gilpin.W.）が、イギリスの風景画について、城の風景が入ったものこそが“真の生き生きとした風景画”であるという運動を起こし、そうした絵を広めることに努力したことが注目される。廃墟となった城も今や“魅力ある廃墟（a fashionable ruin）”として評価されるものとなった。ロンドン塔も所蔵の甲冑類を中心に1828年に一般公開された。1841年には最初のガイドブックが出され、1858年には見学者は年に10万人を超えたといわれる。

もとより、城の中には軍隊駐留に専ら使用されたものもある。また、新規に改修されたものや、あるいは新規に建造され、レプリカといわれるものもある。その一方、城の保存運動も高まり、イギリスではすでに1877年“古建築物保護協会（Society for the Protection of Ancient Building）”が設立されている（C1, p.24ff.）。1884年にはイギリスの城についての最初の専門的な書といわれるクラーク（Clark,G.T.）の著（C2）も現れている（K1, p.6）。

【参考文献】

- B: Britain Express, Passionate about British Heritage (List of Castles in England, Scotland, Wales), retrieved August 17, 2016, from: [https://www.britainexpress.com/Where_to_go_in_Britain/castles/castles-in-england_\(scotland,wales\).htm](https://www.britainexpress.com/Where_to_go_in_Britain/castles/castles-in-england_(scotland,wales).htm)
- C1: Castles in Great Britain and Ireland, Wikipedia: the free encyclopedia, retrieved August 16, 2016, from: https://en.wikipedia.org/wiki/Castles_in_Great_Britain_and_Ireland
- C2: Clark,G.T. (1884), *Mediaeval Military Architecture in England*, London
- K1: Kenyon,J.R. (2010), *Castle Studies in Britain since 1945*, Cardiff University.
- K2: King,D.J.C. (1983), *Castellarium Anglicanum*, retrieved August 17, 2016, from: <https://www.gatehouse-gazetteer.info/Books/booktext/cadjck.html>
- L: List of Castles in England, Wikipedia: the free encyclopedia, retrieved August 16, 2016, from: https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_castles_in_England
- S: Shell Keep, Wikipedia: the free encyclopedia, retrieved August 24, 2016, from: https://en.wikipedia.org/wiki/TShell_keep
- T1: Tower of London, Wikipedia: the free encyclopedia, retrieved August 16, 2016, from: https://en.wikipedia.org/wiki/Tower_of_London
- T2: Types of Castles, retrieved August 16, 2016, from: <https://medievalcastles.stormthecastle.com/essays/the-types-of-castles,htm>

別表：ヨーロッパの100名城

城 名 称	所在地
ドゥーン・エンガス	アイルランド
ウィンザー城	イギリス
ウォリック城	
エディンバラ城◎	
カーファイリー城	
カーナーヴォン城◎	
コーンウィ城◎	
ドーヴァー城	
ハーレック城◎	
ロンドン塔◎	
城郭都市ヨーク	
エステ城◎	イタリア
カステル・デル・モンテ◎	
カステル・ヌォヴォ◎	
カステルヴェッキオ◎	
サンタンジェロ城◎	
スフォルツァ城（イモラ）	
スフォルツァ城（ミラノ）	
フランチェスコ城	
城郭都市アッシジ◎	
城郭都市ボルトヴェネレ◎	
城郭都市ボルトフェライオ	エストニア
トームペア城◎	
ハイデンラインシュタイン城	オーストリア
フォルヒテンシュタイン城	
ホーエンヴェルフェン城	
ホーエンザルツベルク城◎	
ホッホオースターピッツ城	オランダ
城郭都市マーストリヒト	
ディリンズのアクロポリス◎	ギリシャ
パラミディ城◎	
ミケーネのアクロポリス◎	
リンドスのアクロポリス◎	
城郭都市ミストラ◎	
城郭都市ロードス◎	
聖ヨハネ城郭修道院◎	クロアチア
城郭都市ドゥブロヴニク◎	
ロッカベンネ◎	サンマリノ

城 名 称	所在地
シヨン城	スイス
ベンリッツォーナ3城◎	
グリプスホルム城	スウェーデン
アルハンブラ◎	スペイン
コカ城	
シグエンサ城	
セゴビアのアルカサル◎	
ベルモンテ城	
城郭都市アビラ◎	
城郭都市コルトバ◎	
城郭都市トレド◎	
スピシュスキー城◎	
リュブリャナ城	スロベニア
カレメグダン城	セルビア
プラハ城◎	チェコ
城郭都市チェスキークルムロフ◎	
クロンボー城◎	デンマーク
フレデリクスボー城	
ヴァルトブルク城◎	ドイツ
コーブルク城	
ハイデルベルク城	
プファルツ城◎	
ブルク・エルツ城	
マルクスブルク城◎	
ライヒスブルク城	
リーメスとザールブルク城◎	
城郭都市ニュールンベルク	
城郭都市ローテンブルク	
テオドシウスの城壁	トルコ
アーケルスフース城	ノルウェー
ブダ城◎	ハンガリー
スオメンリンナ◎	フィンランド
アンジェ城	フランス
アンボワーズ城◎	
ヴァイトレ城	
ガイヤール城	
シノン城◎	
タラスコン城	
ディフ城	

城 名 称	所在地
フジエール城	フランス
モンサンミッシェル城郭修道院◎	
城郭都市エグ・モルト	
城郭都市カルカソンヌ◎	
パパ・ヴィダ城	ブルガリア
ニヤスヴィシュ城◎	ベラルーシ
ディナン城	ベルギー
ブランドル伯城	
マルボルク城◎	ポーランド
サンジョルジェ城	ポルトガル
ドスムーロス城	
城郭都市オビドス	
城郭都市バレッタ◎	マルタ
城郭都市リガ◎	ラトビア
城郭都市ヴィリニユス◎	リトアニア
ファドゥーツ城	リヒテンシュタイン
コルヴィネシティロル城	ルーマニア
ブラン城	
ヴィアンデン城	ルクセンブルク
城郭都市ルクセンブルク◎	
カザンのクレムリン◎	ロシア
ノヴゴロドのクレムリン◎	
モスクワのクレムリン◎	

注1：◎印は世界遺産。

出所：公益財団法人・日本城郭協会 2010 年 12 月 24 日公表。